

## 観光フォーラム

## 観光（Kanko）を世界的用語に！

Enroll *Kanko* into English Vocabulary!

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

日本（語）では、「観光」という言葉に対し、良い意味でかなり強くこだわる傾向がある。このことは、端的には、英語の *tourism* のいわば訳語にあたる（カタカナの）「ツーリズム」という言葉があるにもかかわらず、それとは区別して時には強く「観光」が使用されるところに表れている。しかもこれは、2つの方向で行われている。

第1の場合は、英語の *tourism* に対して、それを日本語では「ツーリズム」といわないで（訳さないで）、（意識的に）「観光」と表記している場合である。代表的な例に“World Tourism Organization”（現在の正式略称は UNWTO）がある。これは日本語では“世界ツーリズム機関”と訳しても特段におかしいものでないし、意味的にはその方が正解ともいえるものであるが、「世界観光機関」が正式訳名とされている。これは、後述のドイツ語の場合とくらべると実に特徴的である。

これと同様なことは、逆の仕方でも行われている。この場合は例えば日本国内の機関などにおいて日本名は「観光」としながら、英語名は *tourism* としているものである。この例は枚挙にいとまがない。例えば国土交通省の「観光庁」は、正式の英訳名は“Tourism Agency”とされている。大学の「観光学部」などもほとんどがそうになっている。これらは、いわば「観光」が英語の「*tourism*」や「ツーリズム」と化さないよう、日本語ではあくまでも「観光」であって「ツーリズム」ではないことを主張し、「観光」という言葉を堅持（防衛）しようとする試みといえる。

第2の場合は、「医療ツーリズム」や「ボランティアツーリズム」などで、この場合には英語で「*tourism*」であるものがそのまま「ツーリズム」と表記され、「観光」という言葉は使用することをいわば“否定”されている。確かにこれらのもの場合には、「医療観光」や「ボランティア観光」と表記されれば、意味が異なるものとなり、本来のものとは別の趣旨のものになってしまう。

この例では、同じ日本語同士の間でありながら、「観光」と「ツーリズム」とが峻別され、いわば「観光」概念の純化が図られているのである。最近「パワースポット」といわれるものが脚光を浴びているが、これも一部新聞報道ではわざわざ「観

光とは少し意味が異なるもの」と表現している（注1）。

ここで注意されるべきことは、以上のような英語の「*tourism*（日本語のツーリズムを含む）」と、日本語の「観光」とは、公的に定められている統計上の定義（definition）では、範囲のうえで全く区別されていないことである。まず日本（語）の場合、例えば日本の観光庁制定の「観光入込客統計に関する共通基準」（現行は2013年3月改定のもの）では、「観光とは余暇、ビジネス、その他の目的のため、日常生活圏を離れ、継続して1年を超えない期間の旅行をし、また滞在する人々の諸活動」と定義され、その場合「旅行・滞在地で報酬稼得を目的としないもの」を観光入込客と定義するものとなっている。

これは、実は、前記の「世界観光機関」で定めている（統計上の）定義をそのまま適用したものである。すなわちこの UNWTO の「定義」によると、観光客（ただしここでいう UNWTO の場合、正確には「国境を越えて旅行する visitor」が対象）には、大別して次の3者が区別なく含まれるものとなっている（注2）。①レジャー・リクリエーション・休日消費のもの（leisure, recreation, holidays）、②友人や親者など訪問のもの（visiting friends and relatives：VFR）および健康上や宗教上の旅行者、③ビジネスや職業上の旅行者。（ただし以上いずれについても訪問地での報酬稼得を目的とするもの、および旅行・滞在が1年以上になるものは除く）

こうした「*tourism*」（日本の場合は「観光」）の広い定義については、海外（例えば英語圏）でも日常用語の *tourism* を越え、違和感があるという声がある（注3）。しかし統計をとるうえではこれらの（例えば UNWTO 定義における）3者を区別することは実際上不可能に近いから、このような規定は「統計上の定義」としてはやむをえないものである（注4）。

そこで、英語の *tourism* を含め、以上のような（統計用の）「定義」とは別に、*tourism*・ツーリズム・観光について、そのいわば特性・本性を明らかにした「概念（concept）」が必要という声がかき起している。事実、英語圏を含む多くの国では種々な論者により（統計用の）「定義」とは別に「概念」を規定する試みが行われている。（日本語の）「観光」が「*tourism*」・「ツーリズム」と異なる独自性も、この概念のレベルで明らかにされればよいものである。

では、概念としての「観光」はどのようなものか。まず、その範囲でいえば、日本語で通常「観光」といわれるものは、要するに余暇時間消費目的のもので、前記の「UNWTOの定義」のなかでは①だけをいうものである。

その際注目されるべきことは、日本語の「観光」には「tourism」や「ツーリズム」にはない質的な独自性があることである。つまり、バックボーンとなっている考え方、特性に違いがあるのである。本稿筆者のみるところ、日本語において「観光」という場合と、「tourism・ツーリズム」という場合とを区別する決定的な違いは、まさにここにある。

端的に言えば、「観光」は単なる「ツーリズム」や「物見遊山」などとは異なり、その言葉通り何らかの「光を観るべきもの」をいうのである。少なくとも日本人々が「観光」という言葉にこだわるのは、それがとにかく「光を観るもの」ということを表現したいと思っているからにほかならない。

これは直接的には、「観光」という言葉（漢字）自体に感じる日本人特有の文化あるいは精神から来ているものであろうが、これには何よりも「観光」の語源に遡って考えてみる必要がある。物事にはすべて歴史的背景・経緯がある。よく知られているように、日本（語）の「観光」は、中国の古典『易経』にある「観国之光、利用賓于王」を語源としたもので、これによれば、「観光」は端的には「国の光を観ること」を意味する。

しかし、現在の「観光」では「国の光を観ること」は字義通りには考えることができない。つまり「光を観ること」としても「国の光」というのは時代に合っていない。だが、「光を観ること」自体は、今日でも脈々と受け継がれてきているのではない。そしてこの場合、「何が光となるか」は個々の観光客に任されていると考えるべきものであると思う。

すなわち、今日の「観光」は、単なる余暇時間消費の享受に志向しただけのものではない。この点はいわば「観光」の必要条件である。そのうえに十分条件として「観光客それぞれが自己の判断で光と思うものを観ること」という条件が不可欠なものとして加わっていると考えるべきものである。従って「観光」における「光」には、「観て楽しい」という要素も加わったものであり、「観る」には「行動すること」、すなわち体験したり、（例えば地元の人々と）交流するという要素も加わったものである。

ただしそれは、あくまでも、観光客それぞれの判断・好みにより決まるものである。今日の「観光」概念では、これが最も肝心な点である。つまり、まとめていえば、今日における日本（語）の観光は、「観光客それぞれが光と思うものを観るもの」と概念規定されるべきものである。

そうとするならば、日本（語）の「観光」は、英語においても単に「tourism」と表記されるのは適当とはいえない。以上の意味における日本（語）の「観光」を適確に示す英語は見当たらないから、「観光」は英語でもそのまま「Kanko」として表記されるようになるのが適当であると思う。

ちなみに、日本語の言葉のなかには、以上のような意味において世界的に、つまり英語においてそのまま使用されているものがいくつかある。例えば「津波」はそのまま“tsunami”になっているし、トヨタ生産方式の支柱の1つである「改善」は、そのまま“kaizen”になっている。

逆にドイツ（語）の場合をみると、日本（語）の「観光」にあたるドイツ語の本来の言葉は“Fremdenverkehr”であった。ところが、特に1967年の国連指定の「International Tourist Year」がドイツ語では「Jahr des Welttourismus」（直訳的には世界ツーリズム年）と表記され、Fremdenverkehrという言葉は無視されたことを大きなきっかけとして、英語のtourismにあたるTourismusへ地滑り的な転換が起きた。それまでFremdenverkehrを使っていた観光関係諸機関も一斉にTourismusという名称に改名し、1980年代以降にはFremdenverkehrはほとんど死語のごときものとなってしまった（注5）。

この国連指定の1967年の名称は、日本（語）では「国際観光年」と訳されている。さらに付け加えると、日本（語）では「世界観光機関」とよばれる前記の「World Tourism Organization (UNWTO)」もドイツ語では「Welttourismusorganisation」（直訳的には世界ツーリズム機関）が正式名称とされ、Fremdenverkehrは使われていない。こうしたドイツの場合とくらべて日本は実に対照的である。「観光」という言葉に対するこだわりを痛切に感じる。

結論的に英語との関連でいえば、日本（語）では「tourism」が「観光」と「ツーリズム」とに訳し分けられている。両者は字義が異なる2つの言葉になっているといってもいい。従ってこれに応じて英語そのものにおいても2つの言葉があり、日本（語）の「観光」については、tourismと区別して「kanko」と表記されるのが相当と考える。「観光」が単なる「ツーリズム」と区別されず、共に「tourism」と表記されるのは、少なくとも日本における用語使用の実態と乖離している。

〔付記〕本稿のような主張はもとより英語論文として整備し、然るべき英文論著において提起されるべきものである。本稿はそれを予定したものである。

#### 【参考文献】

- 注1：『毎日新聞』2014年7月25日夕刊3面  
 2：例えばUNWTO (2013), Methodological Notes to the Tourism Statistics Database; UNWTO (2011), Tourism Towards 2030: Global Overview.  
 3：Leiper, N. (1979), The Framework of Tourism: Towards a Definition of Tourism, Tourist and the Tourist Industry, *Annals of Tourism Research*, vol.6; reprint in: Williams, S. (ed.) (2004), *Tourism: Critical Concepts in the Social Sciences*, vol.1, London: Routledge, pp.25-44.  
 4：大橋昭一 (2013) 「ツーリズムの定義と概念に関する一考察—ツーリズム概念の革新を目指す一つの試み—」『和歌山大学・観光学』第8号、13-22頁参照  
 5：Tourismus, Wikipedia: der freien Enzyklopädie.